



二 面接 I

もう、何時間も立っているように思えた。腕時計を見る。短針は1を差し。長針も1を差している。このドアの前に立ったのが午前十時だったから、わずか五分しか経っていない。それにもかかわらず、何時間もここに立っているように感じる。手のひらが汗ばむ。

日常生活では、手のひらに汗なんてかくことはない。手のひらに汗腺があるとは思ってもいなかった。だけど、今は、体中の水分がこの右手と左手に流れ込んで、汗の池になっているようだ。それぐらいに美里は緊張していた。

これが、地面から噴き出しているのだったら温泉になるだろう。でも、自分の手のひらだったら、温泉にはならない。まさか、手のひら温泉ガールにでもなってしまったのか。でも、汗臭い温泉なんて誰も浸かろうとしないだろう。そう思うと、くすりと笑えて、ようやく緊張が溶けた。

二回目のドアのベルを押す。頑丈な鋼鉄製のドアだ。招待者でも拒否をしているように見える。まして、自分から訪れた美里にとっては開かずの扉だ。

部屋の中から、誰かがドアに近づいてくる足音が聞こえてくる。美里はドアの真正面に立った。ドアの上にはビデオカメラが備えられており、また、ドアにはレンズの穴もある。部屋の中からは外に誰がいるかはわかっているはずだ。それでも、美里がドアの真正面にあえて立つのは、自分が怪しい人ではないことを証明するためだ。

ここで、おどおどしてはいけない。また、居丈高になってもいけない。普通に、普通にしていればいいんだ。そう思えば思うほど、再び、手のひらに汗がにじむ。駄目だ。美里は、手のひら温泉ガール、手のひら温泉ガール、と呟く。口角を無理やりに上げる。その時、ドアが内側に開いた。そこには、白いスーツ姿の男が立っていた。

「連絡していただいた美里さんですね。お待ちしていました」

物腰が柔らかく、口調が丁寧で、紳士のように見える。いや、見せている。それが、この店の支配人に対する第一印象だった。白いスーツが玄関のドアから部屋の中の方に進む。美里は白いスーツの背中を追う。美里が部屋の中に入ると、後ろの玄関のドアは自動で閉まった。

「あっ」

美里は思わず声を上げた。そこには、至る所の壁に、美里がいた。そう、部屋の壁や天井、床ま

でが鏡となっており、正面には正対する自分の姿が、後ろを振り返れば、見返りする美里が、右を向けば右半身の美里が、左を向けば左半身の美里が、天上を見上げれば、天上から見下ろす美里が、床を俯くと、床から見上げる美里が、そこにいた。美里は反射的にスカートの前を抑えた。

もちろん、鏡に映っているのは美里だけではない。案内してくれた支配人の右半身、左半身、背中、頭、足下、そして、前面が映っている。それらの部分を全て合わすともう一人の白いスーツとなる。

その部屋には、美里と男性の二人しかいないはずなのに、多くの人たちに取り囲まれて、見つめられているような気がした。それは、恥ずかしさなのか、恐怖なのか、よくわからない。ただ、気持ちがよいものではないことは確かだ。唯一、救われるのは、天上から床まで、しかも部屋の端から端まで広がる巨大な一枚ものの窓ガラスには美里の姿が映っていないことだ。

窓ガラスの向こうには、日本式庭園のように、人がヨガをしているような枝ぶりの松の木が植えられ、また、地面には大きな自然石がいくつか並べられるとともに、松や石の周りには白い砂利が隙間なく敷き詰められていた。砂利には、熊手で引いたような筋が、ある場所では円を描いたり、ある場所では波の模様が付いていた。

そして、屋外からは、部屋を表面上飾るかのよう、きらきらと光る陽光が差し込んでいた。だが、それはあくまでも表面上のことだ。この鏡に覆われた部屋から抜け出したい、逃げ出したい。そんな衝動にかられた。そんな美里の気持ちを察してか、支配人が

「どうぞ」

と、椅子に座るよう勧めた。低音の耳たぶから鼓膜を刺激するような声だ。その声を聞いて、美里はようやく支配人の姿をじっくりと見る事ができた。支配人は潔癖性を示すかのよう、白い背広を羽織り、内側には白いYシャツを着こみ、そして白いズボンを履いていた。ただし、ネクタイは着けていない。顔立ちも、胸元に見える肌も服装に負けないくらい白かった。それこそ、全身白無垢だ。

こうして見ると、果たして、白は色なのかどうかと思う。白色は、確かに、赤色や青色などに他の色に染まるだろうけれど、本質的には、他の色を拒絶しているのではないか。他の色に塗り重ねられても我関せずと、孤高の存在を誇っている。そう、白は色ではないのだ。色を取り除いた結果が白なのだ。

「私がこの店の支配人です」

白装束が白いソファに座る。支配人とソファが一体化して、白い山のように見えた。美里は支配人に対峙するように向かいのソファに座った。美里の服装は支配人とは対照的に黒一色だ。肩まで伸ばした黒い髪に、黒いブラウスを羽織り、黒いスカートを着て、黒いハイヒールを履いていた。巨大な白に飲み込まれるかのようにささやかな黒が座る。

同じように白一色のロボットのスタッフがお茶を持ってきてくれた。透明なガラスの器に緑茶が入っている。白に飲み込まれ過ぎていたために、それ以外の色を見ると、心がほっとする。

美里の顔に安堵の色が浮かんだのを見て、支配人が、「いい天気ですね」と窓ガラスの方に顔を動かす。美里の緊張を解くためだ。外には緑が、青が、陽光が、石色が、多彩な色が溢れていた。この鏡張りの透明の空間の中で、白だけが浮かび上がった部屋を補うような色使いだった。

「ええ。そうですね」

美里も窓の外を見る。いや、見ざるを得ない。部屋の中には、四方八方に自分の姿が映っている。普段、鏡の前に立ち、化粧をすることや、服を着た後、姿見をすることはあるけれど、こう一挙手一投足、あらゆる角度から自分の姿を見ることはない。見たいとも思っていなかった。

逆に言えば、この部屋にすることで、普段、自分が他人にどう見られているのかがわかる。顔に笑みを浮かべ、やや猫背気味の背中を伸ばす。胸を張る。両手を軽く握り、膝の上に置く。まるで、しつけ教室の授業を受けているようだ。そう考えると、全身が鏡にさらされている緊張感よりも、笑いが生じてくる。

「何か、おかしいですか」

支配人もほほ笑んでいる。

「いえ。ただ、鏡に映る自分の姿を必死になって整えている自分が可笑しくなって。どんなに取り繕っても変わらないのに」

美里は思っていることをそのまま口に出した。

「いえ。変わりますよ。人は変わることができます。それよりも、面接は終了です」

「えっ。もう終わりですか？」

美里は背筋を伸ばしたまま目を見張る。

「そうです。もう面接の必要はありません」

「そうですか・・・」

果たして合格なのか、それとも不合格なのか。不合格ならば、また、別の職場を探さないといけない。就職はまだ先か。両親にも当分の間、世話にならないといけない。笑みを崩さないようにしながらも、心の中は様々な葛藤が渦巻く。そんな中、支配人から

「合格です。明日から、いや、今日からでも仕事ができますか」

「えっ、どういうことですか」

予想外の支配人の答えに美里は驚き、思わず聞き返した。

「ええ。説明します。ほとんどの人は、この鏡張りの部屋に入ると、緊張して、逃げ出したくなるものです。ですが、あなた、美里さんと呼んでいいですね」

支配人は美里が送付した履歴書をスマホで確認している。

「はい」

「美里さんは、そうした状況を客観的に見ている。見られている。この仕事は、いかに客観的に見るかが重要なのです。第三の目で、自分を見ることができない人は、相手に飲み込まれてしまいます。その点、あなたは動揺したものの、自分を見失うことはなかった。笑うということ自分で客観的に評価ができた。」

この仕事は、相手の感情に寄り添うことは必要ですが、同化することではありません。同化してしまえば相手と同じになってしまい、精神の失調を来すことになるでしょう。なぜなら、相手は一人じゃありません。何人、何十人、何百人のお客さんを相手にしないとイケないのです。その度ごとに、相手に同化してしまえば、自分は失われ、最後には、精神の変調、つまり、気が狂うことになるでしょう」

支配人は美里の顔をじっと見詰める。その眼を見つめ返す美里。鏡張りの部屋には何人もの支配人と美里の姿が映っているが、今は、目の前の支配人しか見えない。

「合格はありがたいのですが、私には、まだ、できるかどうか不安です」

美里は視線を支配人の顔から自分の膝の上に落とした。

「確かに、私の面接には合格しました。資格もお持ちです。ですが、まだ、実際には仕事を体験していません。不安なのはよくわかります。習うよりは慣れる、です。それでは、まず、やってみましょう」

何か美里の指先に触れた。支配人の指だ。

「これを付けてください」

支配人の人差し指には銀色に光る指サックのようなものが装着されていた。それと同じものを美里に手渡した。

「私と同じように機械を装着してください」

美里は言われるままに、機械を右手の人差し指に付けた。

「さあ、手を上げて、人差し指だけを伸ばしてください」

美里は支配人の指示に従い、右腕を上げた。二人の人差し指の先端が触れる。

「眼をつぶってください。何も考える必要はありません。心を空白にしてください。あなたはそれだけでいいのです」

美里は眼をつぶる。何も考えない。心を空白にする。ハートケア士の勉強をした時も同じことをした。学生同士で模擬練習もしたし、講師とも試験を受けた。ただし、指をつなぐことはしなかった。その時は、ただ、黙ったまま、相手の話を聞くだけだった。